

# 郷土の伝統



# 工芸を見直そう

郷土の歴史と風土の中に生れ、育まれた伝統工芸品は、その伝統に裏うちされた固有な「味わい」をもって、私たちの生活の中に心の豊かさや潤いを与えてくれます。

県では、県政の基本方針である「新しいふるさとづくり」の展開の中で、祖先から受けついで文化や伝統を大事にしなから個性のある文化の薫り高い地域社会の創造をめざしております。

ここでは、郷土・熊本の伝統工芸の歴史、生活とのかかわり、現状を紹介し、県民の皆さまと共に、伝統工芸に対する認識と理解を高めたいと考えます。

## 生活に心の豊かさや潤いを

### 暮らしと伝統工芸品

波うちわで風を送りながら木の香の匂うすし桶でまぜごはんをつくっていたのが、扇風機とプラスチックの桶にかわってから、われわれの生活の中から美に対する感覚と、物への愛着の心が失なわれきたような気がします。

そして、「消費は美德なり」のうたい文句におどらされた結果、ゴミ捨て場は不燃焼物の山となってしまいました。

このような浪費文明、使い捨て文明の中において物の美しさや物への愛着を期待するほうが無理な注文で、大量生産——大量消費——大量廃棄、これが現代人が文明的な生活をするための典型的サイクルとされております。

しかし、国民の生活水準が上るにつれ、量的な満足感のみにはあきたらなくなり、ポリ製のくず入れを竹製かごに、

喜ぶべきか、悲しむべきかいささかともどふほどに世はあげて民芸品ブームの時代である。というのも現在ブームの中にあっては民芸品と称するものの中には、民芸本来の使命をはなれてしまったものがあまりにも多いからである。

本来民芸品というのは民衆の中に育った健康な手づくりの実用品で、名もなき工人が無心につくったものでありながら、使えば使うほど味のじみ出てくる用の美をもつものでなければならぬ。しかし機械文明の発展と共に、大量生産される軽薄な実用品のために、伝統をもつ民芸品が姿を消していった例はあまりにも多い。そしてそれと共に、我々の日常生活も又味気ないものに変化していったのである。

幸いにして本県には、まだこれらの大切な民芸品で、細々ながら命脈を保っているものが可成りある。中には昨今のブームに乗って陽の当るものもあるが、どちらかといえば恵まれない存在のものが多いといえよう。

しかもそれらが今日までうけつがれてきたのは、ほとんどが作者の努力によるものである。自然が人間にとって大切なものなら、これらの民芸品も又自然の一部とさえいえよう。



熊大教授

### 私の提言

## 民芸品は心のふるさと

堀

一夫

を生み出すもの

づくりを目ざす本県としては、伝統ある民芸品こそ我々の心のふるさととして大切にしなければならぬ。これまでの育成保護策がともすれば安易な形式主義に流れがちであり、特に伝統民芸品の現代的指導傾向は厳につつしまねばならない。伝統民芸品の良さは、長い歴史の流れに淘汰され、みがき上げられてきた伝統の中にこそあることを忘れてはならない。

又作者も民芸ブームに乗るようなことをせず、民芸本来の使命を認識して良き材料で立派な仕事を心がけてもらいたい。それは

何よりも本当の実用品であり、生活の美を生み出すものであり、誰もが手に入れられるものでなければならぬ。そして伝統的な手法をあくまで守ってもらいたい。それが存続発展させる唯一の道と思われる。

現代機械文明にふりまわされ、人間性を喪失した消費者も自分達の祖先からうけつがれてきた民芸品の中に、健康な人間の精神を汲みとってもらいたい。そして物を大切にすることが、人間にすることの意味を考えてもらいたい。我々の祖先が長い伝統の中にきづきあげてきた生活の美を現代生活の中に生かして使うのが、使い手の器量というべきである。

(熊大教授)

プラスチックのお盆を木製のものに、ビニール袋を木綿の風呂敷へと、生活の中に心の豊かさや潤いを求めてくるようになってきました。

すなわち、われわれは生産よりも生活を、物よりも心を、ハードからソフトへと価値観の転換を始めてきたように思われます。

このように、われわれの生活水準の向上、生活のゆとりは物に対する価値観の変化をもたらししてきました。今までは機械的で便利なものばかりを求めてきたのが最近では使い捨てではなく、長い間愛着をもって使用できる真の良さを備えた製品を求める傾向が現われ始めました。これは、物に対する美の認識や細工の確かさなどを吟味する心のゆとりとでもいえるかと思えます。

今まで気づかなかった木目の美しさ、クロ目の付いた湯呑茶碗、漆器の底光り

## 郷土の歴史と共に歩む

### 伝統工芸品の成り立ちと特質

伝統的民芸品とは、一口でいえば「古くから伝統的な技術によって作り出された民衆の使用する民芸品」であるといえましよう。

これが発生を歴史的にみますと、人間が地球上で生活を始めた頃からその土地の人が必要としたものをその土地の原料

する黒、竹かこの見事な曲線、これらの美しさはむかしから受け継がれてきた日本の伝統の美しさです。そして、このような美しい物を使うとき私たちはこれを作った人の真心を見るような気がし、桶や竹製品を使ったあとは水を切って影干しにし、漆器の重箱を使ったあとは丁寧にからぶきして品物をいたわるでしよう。使い捨ての気持ちにはとうていありません。

われわれが伝統的民芸品の発展を願うとき、上つらだけの懐古趣味やこつと興味でこれを見るときは、必らずやこれら民芸品のだからと一部愛好者の愛玩物となるでしよう。

われわれは、生活の中に豊かさや潤いを、そして美しさを求め、引いてはわれわれを取りまく環境の豊かさを取り戻さなければ、本当の伝統的民芸品の発展をみることができないでしよう。

と、その土地の人の技術によって作り出されてきたものです。

また、これらが各地の特産品としての地位を固めてきたのは、江戸時代における各藩の産業振興による手厚い保護と、他藩への技術流出防止のための統制によるもので、これによって各地にそれぞれ